「中学生」という響きは、ちょっと大人だ。入学式を翌日に控えて壁に吊るした紺の制服が、どことなく誇らしく感じられる。

箱の中で薄紙に包まれたこの制服を取り出したときの感触。身につけたときのうれしい恥ずかしさ。そういうものをずっと忘れないでいようと、鏡の中のいつもと違う自分の姿を見つめながら、有希は思った。

小学校の低学年のときから、日記はずっとつけていた。この日も制服のサージの手触りから、匂いから、自分の持ったありとあらゆる印象を有希は大学ノートに書きつらねた。その日に起こった出来事から感じたことまで、すべてを事細かに有希は書いた。風の色も雨の匂いも、会話のひと言ひと言も、毎日ていねいに日記に記した。

「ちったん、お風呂空いたよー」

湯上がりの姉が顔をのぞかせた。

干したみかんの皮を浮かべた湯船につかりながら、有希は翌日の入学式を思い浮かべた。

(どんな子たちと同じクラスになるのだろう)

(ひいきする担任だったら嫌だなぁ)

(クラブ活動は何にしよう。放送部?　軽音楽部?　やっぱり美術部がいいかなぁ)

(ひょっとして、カッコいい先輩がいるかもしれない……!)

ほとんどのぼせそうになりながら、中学生活に対する期待はどんどんふくらんだ。

ところが、有希が入部届けを出したのは、バレーボール部だった。入学してから数ヵ月後、転校生の世話を先生に言いつけられて、つき合っていろいろなクラブを紹介しているうちに、その転校生に強引に誘われたのである。

「私、バレーボール部に入りたいんだけど、磯谷さんまだクラブ決めてないんだったら、一緒に入らない?　途中からだから心細くて」

バレーボールに興味はなかったにもかかわらず、有希はなんとなくOKしていた。

それが恋の始まりだった。

バレーボール部の練習は、予想以上に厳しかった。全道大会でも上位にランキングされるクラブで、先輩たちは中学生とは思えないほど背が高かった。

途中から入部したのと小さいのとで下手だったせいもあり、先輩たちはとくに有希につらくあたった。めだつまいとして自分の意見をはっきり言わず、愛想もないのが、よけいに癇に触ったようだった。

「球拾いだけやってりゃいいってもんじゃないのよ、磯谷さん」

ミーティングのたびに有希は集中砲火を浴びた。

女子バレーボール部には暗黙の了解があった。それは、先輩から「さん」づけて呼ばれる後輩は嫌われている、というものだった。入部したから半年、他の1年生がみんな呼び捨てにされているにもかかわらず、有希だけは変わらず「磯谷さん」と呼ばれていた。

「じゃあやめます」とあっさり退部することもできた。実際入部した1年生の大半は、厳しい練習に耐えきれずに途中で退部していた。だが、一度始めたことを途中で投げ出すのは嫌だった。小学校のとき習った習字や絵や歌やピアノは途中でやめてしまったが、今度だけはやめたくなかった。

(下手なままやめたくない)

妙な負けん気が有希を支えていた。それにくわえて、隣のコートには気になる男の子もいた。

同じ1年生なのに自分よりはるかにうまくカッコいい彼の姿を、有希は気がつくと目で追うようになっていた。

年が明けて、バレンタインデーがやってきた。その頃には彼とも顔見知りなり、会えば短い会話をする程度の仲にはなっていた。

「バレンタイン、誰にあげる?」

練習の後、部屋で着替えていると一緒に入部したマキが聞いてきた。

「とりあえず顧問の先生にはあげるでしょ」

「そうだね、とりあえずね。でも、やっぱり好きな人にあげたくない?」

「うん……」

「私は例の先輩にあげようかな……有希は?」

そう聞かれて、つい口がすべった。

「私、橘くんがいいなって思ってるんだよね……」

「あげなよ!　橘くん、カッコいいじゃない。　絶対いいよ!」

けしかけられて、イブの夜にせっせとお手製チョコレートまで作った有希だった。

昼休みに、勇気を出して呼び出した。

「コレ、あげる」

そっけないわたし方だったが、彼の反応は意外なほど良かった。

「うそ。やったー!」

本当に喜んでいるような彼の笑顔を見て、有希の中にははじめて“好き”という感情が芽生えていた。

交際はこうしてスムーズに始まった。始まったと同時に、噂もあっという間に広まった。同じバレーボール部である。先輩たちがその噂を耳にしないわけがなかった。

「磯谷さんは彼がいるから、バレー部やめないんだよね」

「男に色目ばっか使ってんじゃないよ」

針のむしろに立たされているような練習時間、男子コートの彼に視線を送る余裕など、一瞬もなかった。それをわかっていて先輩たちはわざと言った。

(絶対にやめない)

先輩たちからそんなふうに言われれば言われるほど、有希は頑に思っていた。意地もあったが、何より彼が好きだからなどという理由でバレーボールをやっていると思われるのが、我慢ならなかった。厳しい練習に耐えてここまで続けてきたのは、自分なりに上手になりたかったからだし、少しずつバレーボールに愛情も感じてきていた。その時間の積み重ねをあっさり放棄することなどできなかった。

部活が終わると正門で待ち合わせて帰るようになった。

先輩たちの目も気にせず、ふたりは肩を並べて歩いた。はじめて見たときより、彼はずっと背が高くなっていた。

(カッコいい……)

会ってないときはいつも彼のことばかり考えているのに、実際会うと胸がドキドキして思うようにしゃべれない。

「じゃあ」

家の前で別れると、すぐに後悔をした。言えなかった言葉を部屋にこもって日記に書いた。

会っても、会わなくても、“好き”という感情はどんどんふくらんでいった。

家族で食べるジンギスカンも、前ほどおいしくなくなっていた。